第 36 回日本受精着床学会・学術講演会
O-138
千葉、2018.7.26-27

新鮮胚移植と凍結融解胚移植による出生児の長期予後調査結果と男女間の相違点

小橋朱里[1]、一色納菜子[1]、水野里志[1]、福田愛作[1]、森本義晴[2]
[1]IVF 大阪クリニック、[2] HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】これまでに体外受精から生まれた児について様々な報告がされているが、殆どが出生時のものであり、出生後長期に及ぶ調査の報告は少ない。そこで出生後に長期にわたり体外受精児をフォローアップすることが体外受精の安全性を検証するうえで重要であると考え、我々は 2008 年以降に体外受精-胚移植により単胎出産された児について最長 8 歳までの予後調査を実施したので報告する。
【方法】2008 年 1 月から 2016 年 12 月の間に新鮮胚移植（F 群)及び凍結融解胚移植（C 群)を施行し単児出産に至った F 群：717 児、C 群：2278 児を対象とした。まず、出生時の体重、身長、先天異常率を両群間で比較。次に継続調査に同意の得られた F 群 278 児、C 群 950 児を対象に 1 から 8 歳まで 1 歳毎の体重、身長を両群間で比較した。さらに、5 歳までの成長過程で判明した異常について解析した。なお、身体発育に関する項目は全て男女別に比較した。【結果】女児の身体発育は、出生時、1 歳での体重、及び 7 歳での身長において、C 群の方が F 群と比べてそれぞれ有意に大きい値であった（2990.5±479.2g vs 2918.8±443.7g、8.7±0.88kg vs 8.5±1.2 ㎏、121.6±4.3cm vs 116.6±5.1 ㎝)。女児のそれ以外、男児の身体発育に関する全ての項目に両群間で有意な差は認められなかった。出生時の先天異常率は、C 群で 2.8%(64/2278)、F 群で 3.6%(26/721)と有意な差は認められなかった。しかし、5 歳までに C 群の 4 児で新たに先天異常が発覚した。
【考察】身体発育について、女児の出生時体重は C 群の方が F 群に比べて有意に重かった。さらに、１歳以降の身体発育で有意差が出た２項目はともに女児で、C 群が F 群に比べて身体発育が良いという結果であった。凍結胚移植の影響が女児で起こりやすい可能性や出生時の身体発育の差が長期的に引き継がれる可能性が示唆された。5 歳までに C 群において新たに異常が発生したことも長期予後調査の重要性を示す結果となった。